

おわりに

本校の研究は、子どもがかかわり合い、思考が連続する学習活動を展開することで、思考力・判断力・表現力を育む学習活動を模索することが目的です。

子どもは、問題解決的な学習活動の過程で、問題を把握し解決していきます。教師が、子どものかかわり合いを生かし「状況に応じた適切な〇〇をする」ことで、子どもは、より深い思考場面へと移行し、問題を解決していきます。

教師が「状況に応じた適切な〇〇をする」ためには、教材の本質を理解し、ねらいをつかむ力・共感的に子どもを理解し実態を把握する力・子どもの意識の流れに沿った授業を構成する力等を身につける必要があります。これらは一朝一夕に身につくものではなく、日々の実践の積み重ねにおいて身につくものです。目の前の子どもとともに、日々失敗や成功を繰り返しながらの実践の積み重ねです。

実践研究のよさは、互いに研究主題・副題等を共有し、具現化のために「事実＝目の前の子どもの姿」を土台に取り組むことです。どんなによい〇〇と考えても、目の前の子どもの姿が、その是非を決定します。子どもの姿をもとに、ともに同じ悩みを話し合い、解決の方策を探ろうとします。

実践は、自覚なしに積み重ねても、教師として得るものは少ないと考えます。実践から「何を学ぶのか」を自覚した教師・教師集団は大きく飛躍することができます。日々の実践に埋没するのではなく、「子どもの姿＝事実」から意味を見出す実践を通して学ぶ教師であってほしいと願います。

本校の教師集団は、「子どもの姿＝事実」の前に「謙虚」です。子どもの姿を真摯に受け止め、「教師が行なった〇〇＝行動」をふりかえる姿勢を持っています。また、授業力向上のための研修の「場」も様々な設定してきました。なんと言っても「学び」に向かう姿勢を持った子どもです。

個々の教師が、教師集団が、焦点化・具体化・共有化を図りながら、子どもの姿に対し謙虚に、自らの「授業」を見つめ直すことで、本校の研究は、さらなる前進を期待できます。

また、授業のあり方、子どもの学ぶ姿、教師の指導等をごらんいただき皆様方の忌憚のないご意見、ご指導を頂くことも、本校の研究推進に欠かせません。今後ともご指導の程よろしくお願い申し上げます。

金沢大学附属小学校
副校長 林 良彦



研 究 同 人

金沢大学附属小学校

校 長 山 本 一
副 校 長 林 良 彦
学内教頭 乗 富 章 子

国 語 科	笠松 雅美	加納 篤	伯 耆 身 奈 子
社 会 科	澤 田 兼 祐	上 田 雅 人	
算 数 科	金 岡 弘 宣	岡 山 優	木 谷 崇
理 科	岩 崎 誠	小 網 達 也	森 田 健 太 郎
生 活 科	山 岸 留 美	中 村 良 恵	
音 楽 科	大 滝 菜 保 美	乗 富 章 子	笹 谷 真 理 子
図 画 工 作 科	宮 本 美 紀	宮 下 智 子	
家 庭 科	中 田 泉		
体 育 科	山 下 亜 寿 佳	古 田 正 樹	
道 徳	北 野 美 紀	盛 一 純 平	
英 語 教 育	堀 井 洋 一		
情 報 教 育	中 山 信 之		
保 健 教 育	吉 本 貴 世		

課 題	木 谷 崇	岡 山 優	森 田 健 太 郎
学 び の 実 感	中 村 良 恵	宮 下 智 子	北 野 美 紀 笠 松 雅 美
学 び の 過 程	伯 耆 身 奈 子	金 岡 弘 宣	大 滝 菜 保 美
か く	古 田 正 樹	山 岸 留 美	澤 田 兼 祐 岩 崎 誠
ス キ ル	加 納 篤	笹 谷 真 理 子	中 山 信 之
グ ル ー プ	盛 一 純 平	堀 井 洋 一	中 田 泉 山 下 亜 寿 佳
交 流	小 網 達 也	上 田 雅 人	宮 本 美 紀

旧 同 人

井 原 良 訓 山 下 尚 高 田 徹
橋 本 俊 彦 基 村 俊 成 松 井 由 紀

